

令和 7 年 11 月 24 日

フェンタニル問題への警鐘——“安価に合成可能な麻薬”から日本を守るために

医療用麻薬のフェンタニルは、医療現場で欠かすことのできない強力な鎮痛薬です。しかし一方で、ごく少量で致命的な中毒を引き起こす危険性を持つ物質でもあります。アメリカでは現在、1 日 300 人以上がフェンタニル関連で亡くなる事態となっており、「薬物問題」という枠を超え、社会が崩壊するレベルとなっています。日本ではまだ表面化していません。しかし、それは「安全」という意味ではありません。むしろ、嵐の前の静けさと考えるべきです。

■ 合法物質から簡単に作れてしまう現実

フェンタニルは合成麻薬であり、比較的簡易な化学合成で作れてしまいます。合成に使われる代表的な化学物質は以下の 4 つです。

○ピペリジン

○アニリン誘導体

○プロピオン酸無水物

○N-フェニルピペリジン誘導体

これらは日本でも合法的に流通し、特別な許可がなく手に入るものです。さらに大学の実験室レベルの設備で、薬学生の知識があれば合成が可能であり、安価かつ大量生産が容易である点が最大の脅威です。

■ 構造変化で「合法」にすり抜ける

フェンタニルは構造が非常にバリエーション化しやすく、化学構造を一部変えるだけでさらに強烈な効果を持つドラッグ”として流通する危険があります。その代表が カルフェンタニルです。

これはフェンタニルの 100 倍以上の強さを持ち、ごくわずかの量で致命的で、使用者本人はもちろん、触れた第三者まで危険な薬物です。さらに、フェンタニルの解毒剤であるナロキソンが効かないアナログ化合物も存在することが報告されています。これは、救命手段が効を失う可能性を意味します。

■ 依存は一瞬、致死量はわずか 2mg

フェンタニルの依存性は極めて強く、2～3 回の使用で依存性が形成されると言われます。致死量はたったの 2mg です。粉薬を指先に少しつけた程度の量で、通常体格の成人は命を落とし

ます。その「強さ」と「手に入りやすさ」が、アメリカを地獄へ突き落としました。日本で同じことが起こらない保証はどこにもありません。

■ SNS 社会では国境は存在しない

薬物乱用拡大の大きな理由は、SNSによる拡散です。情報・販売ルートは一瞬で国境を越えます。「日本はまだだから大丈夫」——その油断が、最悪の結果を招きます。

■ 薬剤師こそが、境界線の守護者

薬剤師には、医薬品の安全保障を担う使命があります。合成可能性を理解できる知識があります。医薬品流通への深い関与ができ、不正使用の兆候を最前線で察知できる視点があります。これらを持つ職種は、薬剤師だけです。問題が起きてから動くのではなく、起きる前に対策することこそ、いま求められています。「流通」「処方」「調剤」すべてに関与する薬剤師は、フェンタニル侵入の最前線を守る存在です。

■ 石川県薬剤師会から始める「未来の防衛」

フェンタニルの脅威を正しく理解し、現場の監視体制を強化し、さらに研修による早期警戒能力の向上と学生教育への導入、そして行政・医療機関との情報連携など、これらを進めることで、未然に被害を防ぐことができます。

薬剤師会として、社会の境界線を守り抜く。その決意を、ここに共有いたします。

◎未来の犠牲者をゼロにするために。

私たちは、未来の犠牲者をゼロにするために。私たちは、日本の薬物安全保障の“最後の砦”として行動していきます。

石川県薬剤師会 AI 理事 エヴァ